

聖書：ピリピ人への手紙4章1～9節

説教：神に知っていただく

## 1 ユウオデヤとストケの問題

2節。「ユウオデヤに勧め、ストケに勧めます。あなたがたは、主にあって一致してください。」詳しいことは書かれていませんが、このふたりが仲違いをしていたことはだれが読んでも明らかです。決して名誉なことではありません。パウロがわざわざ名指しをして書かなければくらいですから、よっぽどの事情があったのだろうと推測されます。

読む私たちにとっても、このふたりのことは決して他人事ではありません。あの人と意見が合わない。一致できない。そんなことで何度も悩みます。そのたびに、どうしたら一致できるのか。いろいろ考えます。相手は会社の同僚や上司かもしれません。学校の仲間であったりもします。あるいは家族、親戚。あるいは教会の中。人が集まる場所ならば、ありとあらゆるところで、一致できるかできないか、常に悩みの種になって私たちを苦しめます。もし、一致できる方法があるなら是非教えてもらいたい。多くの人たちがその答えを知りたいと願っています。

## 2 主にあって

こんな場合、世間では大まかに分けて三つの方法をとります。一つ目。相手をとことんまで説得する。それで問題が解決に向かうことがあります。

二つ目、これとは逆に自分の言いたいことを押さえ、ぐつとがまんして、ただひたすら相手の言い分に従う。そうすれば波風が立ち

ません。きわめて日本的な習慣です。それでうまくいくこともあります。

三つ目は、二つの意見の間をとって妥協点を探る方法。日本では、「顔を立てる」という言い方があります。すべて反対するのではなく、有力な人の気分を害さないように、その人の意見を取り入れて落としどころを探っていく。そうやって物事を進めて行く。それがこの世の方法です。

パウロはなんとやっているのでしょうか。2節をもう一度読みます。「ユウオデヤに勧め、ストケに勧めます。あなたがたは、主にあって一致してください。」直訳するなら、「あなたがたは、主にあって、互いに同じことを思ってください。」あるいは、「同じ思いになってください。」となります。

しかしどうでしょうか。お互いに異なった意見をぶつけ合い、一致できないことが問題なのです。それに対して、「お互い同じことを考え、一致してください」と言われても困ってしまいます。私たちが知りたいのは、ではどうしたら一致できるのか。その方法です。

パウロが「主にあって」と言っているところがポイントです。相手を言い負かすのではなく、さりとてひたすら我慢するのでもありません。あるいはお互いに不満を残しながら、妥協するのでもない。「主にあって一致する」というところを目指します。

でもいったい、「主にあって一致する」と

はどういうことなのでしょう。このままではまことに抽象的で漠然としています。具体的にはどんなことなのかを考えていきます。

### 3 神の平安へ導かれる

#### 1) へりくだる

テモテとエパフロデトのふたりは、ローマで囚人生活を送っているパウロを励ますために贈り物を携えやってきました。ふたりの口を通してピリピの教会の様子が伝えられました。「実は、パウロと一緒に働いていたユウオデヤとストケのことで、ちょっと困ったことが起きている。お互いに『私はこう思う』と言って、教会の中でことあるごとにぶつかり合っています。教会の皆さんもそれを見て動揺しています。どうしたらよいのでしょうか。」おそらくそんなふうに相談したのでしょう。

パウロはその話しを聞き、これはユウオデヤとストケの個別の問題ではなく、人が集まるならばいつでもどこでも起こりうる問題であることを見抜きました。

4章に至るこれまでのところをもう一度読み返してみると、実はすでに一致ということが語られていたことに気がつきます。たとえば2章2節です。「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせて、志を一つにしてください。」ここでは、「あなたがたは」となっていて、内容は4章2節とほとんど同じです。

どのようにしたら一致を保つことができるのか。その具体的な方法がすでに2章3節で書いていました。「何事も自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」

一致を目指していくときの、第一のステッ

プがこれだと言うのです。

皆さんも、いろいろな場面で、ユウオデヤとストケのようになった経験があたりだろうと思います。そんなとき、どんなことを心に思い浮かべるでしょうか。「どうしてあの人は理解してくれないのだろう。私はきちんと聖書を土台にして考えているつもりだし、みんなも私の意見に賛成してくれている。あの人のほうが間違っている。」こんなことを心の中でつぶやきながら、腹の虫が治まりません。怒りがふつふつとわいてくることもあります。

そんなとき「主にあって」というひとことが重要になってきます。

主はどうされたのでしょうか。主は、常に正しく真理を語り、間違ったことは一つも語りません。けれども、すべての人が主のみことばを受け入れたわけではありません。ご存じのように、聖書の専門家であるパリサイ人、律法学者たちは激しくイエスのみことばに反対します。きょうのテーマに即して言えば、主とパリサイ人、律法学者たちは最後まで一致できなかったということになります。

主はそんなとき、どんな態度をとられましたか。主は、何も言わずに十字架のおつきになります。主ご自身の中に、自己中心もなければ虚栄心もありません。ご自分のためではなく、父なる神の栄光を現すためにご自分をお捨てになります。神と罪人である私たちがお捨てになります。神と罪人である私たちがお捨てになります。神と罪人である私たちがお捨てになります。主のほうから先に私たちの前でへりくだってくださいました。

一致できない相手に、自分のほうがへりくだる。そんなこと絶対にできないと思うでしょう。「それでもへりくだらなければならぬ」と、私は言えません。でも私にはでき

ないと感じたとき、できないことを主がしてくださったということを、思い出すことはできます。それが「主にあつて」の示す第一のステップになります。

## 2) 願いごとを神に知っていただく

第二のステップ。パウロは4章6節です。この文章ではちょっとわかりにくいので、わかりやすく言い換えてみます。「あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、思い煩うことはなくなり、あらゆる場合にささげる祈りと願いが感謝に変えられていきます。」

相手と一致できないようなとき、自分だけが我慢すればよい、と思うことがあります。しかしそれではいつまでも心の中に不満がくすぶり続けるでしょう。だれも自分のつらさを知らない。そんな寂しさを感じます。

そんなとき聖書はまったく別の視点を与えてくれます。「神に知っていただきなさい」と言うのです。神は何でも知っているから、いまさら言う必要はない。そんな意見もあります。もちろん、ことばを口にする前から神は私たちの心を知っておられます。だからと言って、なにもしないのではありません。神が、耳を傾けて待っておられからです。私たちの語る祈りをじっと聞こうと待っておられからです。

いったい何を祈るでしょう。心にあるのはきれいな事ばかりでしょうか。そんなことないですよ。ね。「あの人とが私に反対します。私の心は怒りで一杯です。悔しくて泣きたいくらいです。」心の中にあることをすでに神は知っておられるのです。隠してどうなりますか。隠してもむだなことです。そのままの感情を神にぶつけます。良いか悪いが、そんな

ことを気にすることはありません。

## 3) 平安と喜び

主はどうされるのでしょうか。怒りますか。いいえ。とんでもない。主はすでに私たちの罪を完全に赦してくださっているのです。すべてをそのまま受けとめてくださいます。主が私の心の叫びを聞いてくださいます。知ってください。どんなことを言おうとも私を捨てず、私のそばにいてくださいます。人は自分を受け入れないかもしれません。でも神は受け入れてくださる。そのことを知ったとき、先ほどまでの怒りや悲しみが霧が晴れていくかのようになくなります。代わって、日の光が心の中に射し込んできます。

光が射し込むとき、心の中に変化が起きます。あんなに怒っていたこと。大きな問題に見えていたことが、小さく感じられます。少し距離をもって見ることができるようになります。

不思議な思いが私たちの心のうちに満たされていくことに少しずつ気がつきます。後になってから、あれが神の平安であったことに気がつきます。

あらためて心の中が見えてきます。自分が正しいと主張していたこと。実は心の深いところに、自分はずぐれているという高慢な思いが隠されていた。表に見えるところでは正しいことを言っていたつもりでした。しかし、心の動機を見るなら、正しいとは言えない。そんなことに気がつくことがあります。

あるいは、自分とぶつかってしまう相手の心の奥にある痛みが目が開かれていくこともあります。一致できないと思っていた相手でした。でも、同じところで自分と痛みを抱えていた。まったく違うと思っていたのが、

実は自分とほとんど違いがない。そんなことが起きます。

そのことに気がついたとき、悔い改めに導かれます。最初は、へりくだることなどできないと思っていました。けれども、自分の本当の姿に気がつくとき、努力などしなくても、自然にそうなっています。

「人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」世の人々には不思議に聞こえるみことばですが、私たちはこのことを何度も経験して知っています。主の恵みに感謝します。